

我が国における仏教とキリスト教論争に関する思想史

——不干齋ハビアンの『妙貞問答』と

『破提宇子』

研究生 南部 千代里

東洋と西洋という地域的隔たりと発展してきた歴史的過程により、仏教とキリスト教は独自の文化圏を形成してきた。その二者が、あたかもわが国が東西の宗教や文化を代）表する場所の如く上陸し、対立したのである。長い思想史において、高度に発達した宗教、しかも対照的な哲学を持）った二者が、直接論争した事例は他に類を見ない。例えば、中国では唐の時代景教は宣教を開始したが、唐末期には）滅亡している。韓国にも一八世紀に天主教が宣教されたが、）当時の韓国仏教は李王朝の斥仏政策により消滅寸前であつ）た為、天主教を相手にする余裕は全くなかった。その後）小さな論争は起こったが、思想史全体から見ると）中国、韓国における仏教とキリスト教との関係は、日本と）比較するならば消極的なものであった。だがわが国におい）ては、キリスト教が伝来した一六世紀、仏教は衰退期に入）っていたといえ人々の精神生活において支配力を保持し）ていた。それ故激しい論争となったのである。本研究は、）これらを如実に反映している不干齋ハビアンの『妙貞問答』と『破提宇子』を

もって、わが国における仏教とキリス）ト教論争に関する思想史を考察するものである。

不干齋ハビアンは、一五六五年北国に生まれ臨済宗寺の小僧）となり、所化して慧春と称した。一九歳の時にキリシタンの）洗礼を受け、コレジオで七年間神学を修めイルマンとなる。）彼は日本宗教すべてを、カトリックの教理をもって批判し）た『妙貞問答』（一六〇五年）を著作した。だが翌年突如キリ）シタンを棄てる。幕府のキリシタン禁制が厳しくなったの）を機に彼は『妙貞問答』に正面から反論した『破提宇子』（一六二〇年）を公表した。それは關邪の書として、江戸時代）を通じ読まれ続けた。

明治維新後、神道復興に立つ新政府による神仏分離と廢）仏毀釈の運動は、仏教に壊滅的な打撃を与えた。その中で）仏教は自らを近代化すると共に、政府の宗教政策と正面か）ら対決しなければならなかった。仏教は、失踪したものを）回復せんと、その動力を先ずキリスト教に向け自己存在を）主張した。その時ハビアンの『破提宇子』は仏教学者によ）って復刻され、キリスト教批判の拠りどころとして再び注）目された。仏教とキリスト教の闘争の一部に過ぎなかつ）たキリシタン時代の論争と、明治のそれも、信仰の争いである）ことに変わりはないのだが、そこに取り上げられた論点を）比較すると、論争の形態が極めて相似したものであるこ）と）は見逃し難い。何故ならキリシタン時代だけでなく明治に）おいても、一神論と汎神論、

有神論と無神論との優劣が根（本）的な争いであつたからである。この意味において『妙貞問答』と『破提字子』は、わが国の思想史上において重要な地位に立っているのである。